

〔仏教の美術展によせて〕

## ガンダーラの石造二仏供養者像

—高さ32.0cm 幅40.0cm 奥行5.5cm—

ガンダーラとは、現在のパキスタン北部のペシャールを中心とするインダス河とその支流のカーブル河の合流地点一帯を指し、更に、インダス河東方のタキシラ地方からアフガニスタン東辺までを含む場合もあります。ギリシア、ローマ、パルティアの影響の下に、いわゆるギリシア風仏教美術が展開された地帯です。

この地方は昔から、インド本土より北カーブル渓谷を経てバクトリア（今のアフガニスタン北部にあった王国）へ通ずる要路に当り、インドと西方大陸との交渉地帯として、文化史上特に重要な歴史を持っています。この地は、紀元前326年頃に、アレクサンドロス大王の東征によってギリシアの植民地とされましたが、更にその後、紀元前200年代にインドのマウリア王朝の勢力と共に仏教文化が及んでくるに至って、ギリシア風仏教美術誕生の種が蒔かれました。次に、マウリア王朝の滅亡後、紀元前100年代に、再びギリシア系の諸国がこの地を領有して、ギリシア風仏教美術誕生の第二の素地が培われたのです。その開花はインドのクシャーナ王朝の紀元二世紀頃でした。このガンダーラ彫刻の重要性は、第一に釈迦を人間の姿で表わすことがここから始まったこと、次に釈迦の姿に超人的性格を添えるために、釈迦の三十二相・八十種好とよばれる表現上の種々の約束が生まれたこと、仏像の源流がここにあります。

右の写真で御紹介する彫刻には二仏と供養者達の姿が見えます。二仏が中央に居るので、「法華経見宝塔品」に見え、中国で沢山造られた釈迦と多宝如来の二仏並坐像の原流的なも

のではないとも見られています。他の遺例から推測しますと、右の女性は蓋付きの鉢を、左のパルティア風の衣裳を着た男性は右手に花、左手に果実を持っているようです。このような供物を持った人物はガンダーラ彫刻によく登場いたします。後方は、中央の男性がアルメニア系の人物によく見られるように布を頭にかぶり、髭をつけています。左の男性も髭があります。後方右の女性は前景の女性と同じ優雅な髪形をしており、この彫刻ではこれら二女性の風貌が最も気品に溢れています。前景の女性の衣褶の表現はギリシアの女神のそれを思わせるほどです。

本品はガンダーラのスワットで発掘されたものですが、スワット産の石は他の地域のものに比べて質がもろいために、彫刻には彫りの荒いものが多く、ここでも二仏の衣褶や背景の人物の大まかな表わし方にそれが見られますし、仏の風貌にも地方色が見られます。ガンダーラの仏教美術は紀元2・3世紀を頂上として次第に下り坂となりますが、二仏の様式や左手前の人物の衣裳などから、この彫刻は2世紀から4世紀頃の石窟寺院の壁面装飾と思われる。

(村田靖子)

石造二仏供養者像(2～4世紀)



季刊 美のたより No.54

昭和56年 2月 25日

発行 大和文華館